

朗報!! 大学生諸君 ご一報を

4、尖閣へ興味を持つ諸君へ

「尖閣研究」(限定 200 部) 進呈したい

高良調査団を 知らずして 尖閣を語るな !!

尖閣問題を知るための入門書は何でしょう？

「尖閣研究 高良学術調査団資料集」(2007 年刊) が最良の入門書です。

本書は、戦後の尖閣調査の先駆けとなった高良博士の五次に亘る調査報告資料集です。本ホームページの「文献書庫」に幾つかを紹介しています。

「尖閣調査のパイオニア高良博士」もあります。これらもご覧下さい。

戦後の高良調査団の歴史的事実を知ることにより、尖閣問題の真の姿、様々な要素、問題の実相、本質が明らかになるかと思えます。

“ 高良調査団を 知らずして 尖閣を語るな!! ”

そう評しても、過言ではありません。

ぜひ、皆さんに、本書を読んで頂きたいです。

「発刊の辞」(上巻) に、この資料集を手掛けた経緯を記しています。

再度、ここで紹介します。

昨今の尖閣領土問題は、一段と厳しさを増して、かまびすしい。

魚釣島と黄尾島にある明治期の古賀開拓村の写真を見ると、ヘンボンと日の丸がひるがえっている。大手週刊誌記者がその事実を知り、日本領土の紛れない証拠になるとばかりに件の写真を探していた。

問い合わせの電話を受けたときに、些か勉強不足ではないかと苦言を呈した。常に尖閣問題で引き合いに出されるのが島の開拓者古賀辰四郎と古賀村の件である。これは無論、重要な事実である。

他方、地元沖縄側は、終戦直後からいち早く、尖閣の学術調査に乗りだしていた。琉球大学を主体に綿々と調査研究を行い、大きな実積を積み上げていた。今日の尖閣研究はこれら総合的組織的学術調査の成果に負うところが大きい。ところが、この事実は殆ど知られていない、全国的認識不足だった。

この調査は「尖閣調査のパイオニア」高良鉄夫博士によって切り開かれた。

1950年4月、今を去る57年前のことである。

終戦直後の吞まず食わずの厳しい時代に、単独で調査（第一次予備調査）を敢行した。高良博士の先見性と行動力には驚かされる。

翌々年の52年4月、第二次調査には資源の専門家を引き連れて行った。



第二次調査団は、琉球大学生3名を助手として同行させた。魚釣島では行手に立ち塞がる岩崖をよじ登り、古賀村跡の宿営地に向かった。断崖絶壁をものともせずロープで荷物を揚げている2人は助手の学生。（新垣秀雄 1952）

53年8月、第三次は学生11名を参加させた調査だった。

この3回にわたる調査をなし遂げるには並々ならぬ苦労があった。

とりわけ、第三次調査は沖縄経済人の協力で実現できたものともいえた。

63年4月、琉球政府文化財保護委員会から委託をうけて、アホウドリ調査を行った。これが第四次調査である。

68年には沖縄懇高岡大輔氏を案内して第五次調査(鉱物資源予備調査、海鳥調査等)を行った。

これらは50、60年代に実施された琉大調査の前半部にあたる。

高良博士が主導した5回にわたる調査を「高良尖閣学術調査団」と称してもよい。高良調査団に参加したメンバーは延べ40名余に上っている。

(「発刊の辞 上巻」より)



第三次調査には、高良博士は、琉球大学生11名を連れて行き、野外実習調査に挑戦させた。誰もが、尖閣諸島の大自然に魅了された。彼らの冒険心、勇猛さ、心意気に感嘆せざるを得ない。写真は古賀村跡宿営のようす。(田中一郎 1953)

学術調査を通して 尖閣問題の基本知識 学べる!!

「発刊の辞」を続けます

70年代から80年代にかけて尖閣調査が目白押しに実施された。

学術調査、資源調査、漁業調査、等々である。これらの出発点となったのが、高良学術調査団である。

明治30～40年代の黒岩恒氏や宮島幹之助氏、恒藤規隆博士、昭和10年代の正木任氏による優れた調査があったが、いずれも単発的、個別的調査

の域を出なかった。戦後は、様相は一変した。

各分野の専門家を網羅した組織的かつ総合的学術調査がスタートした。

それに尽力した高良調査団の功績は特筆すべきである。

高良博士の果たした役割は大きく、尖閣学術調査の発展に大きく貢献している。

それに比して、その調査経緯や内容は余り知られていない。

加えて、参加者の殆どが高齢となっている。参加者や関係者(所轄機関や部署の担当者)で亡くなった人も少なくない。当時の調査資料、報告書も入手しがたい。

72年復帰に伴う組織変更で所在不明になった資料も少なくない。

琉球農林省資源局、琉球政府、琉球警察局、琉球文化財保護委員会などの行政文書がそれである。年を経るにつれて、ますます散逸が危ぶまれる。

このようなことから資料集のとりまとめが急がれた。

今回、見きり発車であったが、どうにか刊行することができた。

これも高良博士が監修の労を引き受けて下さったからである。

高良博士はもとより、新納義馬氏ら参加メンバーの絶大な協力に負うところが大きい。また、書棚や押入の隅、筐底をあさり、古いアルバムを剥がすなどして、当時の資料を探しだし、快く提供してもらったのも少なくない。このお陰で以て、論文や報告書、写真、新聞記事など、貴重な資料が収録できた。

.....

今後、尖閣領土問題は一段と厳しさを増してくるものと思われる。

尖閣列島に関わる様々な事実については、正しい認識がますます必要となる。

この資料集が、その一助になれば幸いである。

(「発刊の辞 上巻」より)

本資料集は、学術調査に止まらず、往時の尖閣諸島について真の姿、さまざまな歴史的事実を示しています。往時は、島に自由に上陸でき、調査できました。また、島の周りは多くの漁船が操業し賑わいを見せ、島に、海に、自由に往来してました。今は、政府の禁止措置により、島には、誰も上陸できず、海は、中国武装公船が闖入し、漁船の安全は脅かされ、操業もできず、一変して、島も、海も、自由に往来できなくなっています。

日本政府は、中国の圧力攻勢に屈し、弱腰姿勢に終始しています。

加えて、国民は尖閣問題の情報は不足し、多くが認識不足です。

このため、解決の糸口さえ見いだせず、混迷し、危機的状況にあります。

わが国は、今こそ、主権国家として誇りと気概を取り戻し、断固たる解決を図らねばなりません。そのためには、問題の原点に立ち戻る必要があります。

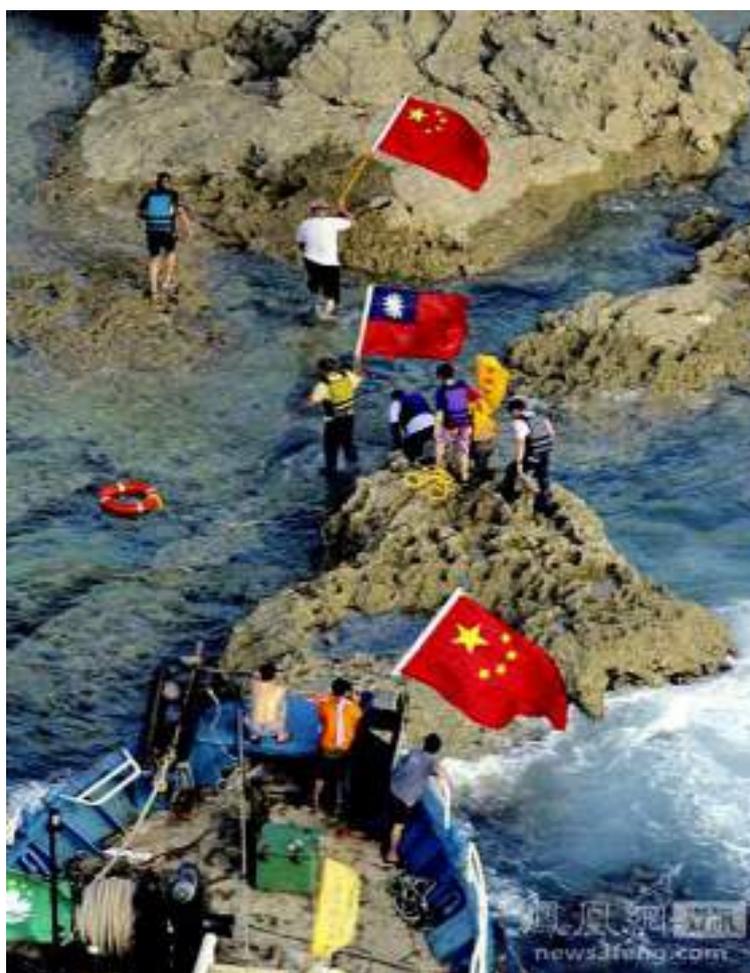
尖閣列島に関わる様々な事実については、正しい認識がますます必要です。
この資料集が、その一助になれば幸いです。

本書をひもとくことにより、尖閣問題の実相・本質、中国のプロパガンダの
構図—様々な要素・諸側面が明らかになるかと思えます。

また、学術調査を通して、尖閣諸島についての基本知識が学べます。

このような意味から、本資料集は、尖閣問題の最良の入門書でもあります。

とりわけ 若い人たちに、ぜひ、本書を読んでほしいです。



香港の活動家たちが魚釣島に不法上陸し、中国台湾国旗を掲げて領有権を主張した。尖閣諸島は歴史的事実からわが国固有の領土である。国民一丸となり断固として守らなければならない。（「鳳凰衛星テレビ 2012.8」より）

学生の身では 高価な本 とても入手できない

数年前の話です。この「高良学術調査団資料集」の件で、電話をもらいました。新聞か、何かで、たまたまこの本のことを知り、尖閣問題に関心あると云う地方の国立大学の女子学生さんからでした。

ぜひ若い人たちに、読んでもらいたいと思っていただけに、嬉しかったです。

いろいろと質問してきたのに答えて、こちらの話を聞いているうちに、さらに興味を持ったのか、ぜひ、本を購入したいと言いました。

「値段は幾らですか？」と聞かれ、「上下巻で 5000 円です」と答えました。相手は、しばらく沈黙してから、「分かりました、また電話します」と急いで電話を切ってしまったのです。後味の悪さを感じました。

学生の身では、5 千円は大金だ、身銭を切って手に入れるには高過ぎると思い、「学生さんだから、プレゼントしましょう」と答えればよかったと後悔しました。相手の名前も電話番号も聞いてなかったのも、先方からの連絡を待つしかありませんでした。

1 週間経っても、ひと月経っても、1 年たっても、今に至るまで、電話は来なかったです。せっかく尖閣問題に関心を持ってくれたのに、諦めざるを得なかった学生さんに申し訳なかった。

この苦い経験から、大学生には、進呈しようと決めました。

尖閣問題は日本の命運を左右する重大な問題です。

日本の未来を担う若者たちに期待します。

若者の純真な心 気概、情熱、勇気、力こそが、この混迷した状況を打開できからです。若者たちよ、尖閣問題に、もっと、もっと関心を持ってほしい。

日本の将来に関わる重大な問題であることを知ってもらいたい。

君らの若い力、英知と勇気が、わが国の宝の島「尖閣諸島」を守る大きな力になるからです。

尖閣に関心ある学生諸君へ 「尖閣研究」進呈したい

尖閣問題に関心ある学生諸君に、呼び掛けたい。

かの資料集は、尖閣問題の最良の入門書であり、基本資料です。

この本をひもとき、尖閣諸島について知識を広め、深めてほしいです。

本編纂会は、関心ある学生に、本書を進呈いたします。

限定 200 名ですので、こぞって申し出て下さい。

希望する学生諸君は、

- ①氏名、 ②住所
- ③連絡先（電話またはEメール）
- ④大学・学部名
- ⑤「尖閣問題」に対する簡単な所感、こんなことに関心や興味をもったとか、内容は自由です。できれば800字（400字詰め原稿用紙2枚）程度ですが、別に字数に制限はありません。

以上を記入の上、メールまたはファクスで、ご一報下さい。

「尖閣研究 高良学術調査団資料集」上下巻（箱なし）価格4,500円を進呈します。

※なお、郵送料について自己負担になります。

本編纂会宛に、封書に「レターパックプラス520（赤）」を入れて送って下さい。本書を、同レターパックに同封して、お送りします。

（了）



尖閣研究 高良学術調査団資料集

※付言

末尾に、本書の「あとがき」を付言しました。
「高良学術調査団」の意義を理解する上で参考になります。

1、尖閣研究 高良学術調査団資料集 上巻 あとがき

尖閣調査の偉業は、研究開発は、
経済界の支援で、成し遂げられた

—復興再建に燃えた時代精神の、自助努力精神の、所産である—

編集子

「尖閣調査のパイオニア」高良鉄夫博士の調査を見るとドラマチックだ。
あの終戦直後に行われた初期調査(第一次～第三次)もそうである。
1950年代のその当時は、ないないづくしの不自由時代である
そんな時代に、よくも尖閣調査ができたものと思う。
毎日が食べるにも事欠く飢餓の時代、逆説だが、だからこそできたかもしれない。
当時は生産増強が至上課題であり、誰もが食糧増産に励んでいた。
「天然資源の開発へ鉱床調査を軍が指示」(うるま新報 1950.8.31)と島ぐるみで
復興再建に取り組んでいた。
氏も、戦争が終わるや、単身愛馬秋月号に跨って石垣・西表島の山野を跋涉踏査
し、悪性マラリアの猖獗するジャングルの中を生物資源・沃地調査に専念していた。
他方、漁業人による食糧増産の波は、尖閣にも押し寄せていた。
戦前東洋一の生産量を誇っていた発田鰹節工場(与那国在、戦後は石垣市大川
で操業)が、魚釣島に仮加工場(古賀氏の工場跡を利用)を設けて、鰹節製造を営ん
でいた。氏が絶海の孤島尖閣へ渡島できると、このチャンスを逃すはずはなかった。
その島こそが、海洋鳥の群舞で天空はかき曇る夢にまで見た古賀無人島だった。
しかも海幸・山幸の天然の富源も、秘めているかもしれない！！
発田重春氏の鰹船に便乗させてもらおうと、渡島を強く懇願した。

ここに1950年の戦後初の尖閣列島調査が誕生するのは周知の通りである。

氏のねらいは3つあった。海洋鳥などの「生物相」、海幸・山幸の「富源」調査。

さらに恒藤規隆博士が「南日本の富源」に記した「海鳥のヒナの訓練」を実見したかった。敗戦後の荒廃した中での青少年教育に資したいとの強い思いからだった。

のち、発田氏へ渡島御礼にと、後生大事にしていた将校用双眼鏡を献上したという。それほど調査できたことに感謝し、尖閣列島の富源にも大きな希望をよせた。

「冬の漁場としての値打ちが高い…、鳥くそを利用することも考えねばならない」(うるま新報 1950. 9 .15)と、期待を込めて発表した。

1952 年、開校まもない琉球大学に赴任するや、資源局琉球林業試験場、水産研究所などに働きかけて、合同調査団を組織し、植物、肥料(鳥くそ)・土性、漁業の専門家と学生3名を引き連れて富源調査を敢行する。

翌年は 11 名の学生を連れて開洋高校の練習船で渡島し、学術調査に精励する。

だが、終戦直後も、当時も、ないないづくしの不自由な時代である。琉球大学は、その前年の 1951 年2月開学、琉球政府もできたてのほやほやである。

奇しくも第二次調査団の出発は3月 29 日、その2日後に琉球政府は創立している。

新聞には調査団出発の記事と並んで「政府創立式典 琉大生も出席を」の見出しで「琉球政府創立式典は4月1日あさ9時より琉大校庭で行われるが、特に琉大当局では首里在住学生の参列を要望している」(沖縄タイムス 1952.3.28)

戦禍で灰燼に帰した沖縄が復興再建に向けて一步一步と、踏み出していた頃である。人材育成のため琉球大学が創設され、行政機構の再建ため琉球政府が創立された。いわば沖縄の学問の夜明け、行政の黎明期の頃でもあった。

無論、大学設立したが、研究費も、調査資金もない、ないないづくしである。

尖閣調査へ行きたくても、先立つものも、何もない。

頼みは経済界、実業人だった。彼等の協力、支援が不可欠だった。

当時の経済人—沖縄の戦後経済の復興再建を担った人々、稲嶺一郎氏(琉球石油社長)、高良一氏(国際劇場社長)、宮城嗣吉氏(沖映社長)、宮里辰彦氏(リウボウ社長)、國場幸太郎氏(國場組社長)、竹内和三郎氏(沖縄食糧社長)らは、こぞって「金」や「物—燃料、缶詰、米などの食料」を支援した。

これは忘れてならない事実である。

第三次調査で参加した新納義馬氏や瑞慶覧長方氏は、経済界の助力があったので調査することができた、いくら感謝しても、感謝しきれものではないと語っている。

当時の経済人は、大学の研究開発に理解を示し、絶大な支援を施した。

高良博士が研究用にハブを飼育していたハブ舎もそうだった。

稲嶺一郎氏(氏は琉石産業研究所も設立していた)の寄付でできあがった。

ここで学生たちがハブに餌を上げるなど手伝いをしていた。
このハブ舎で、ハブの飼育に鍛えられた猛者連が尖閣渡島の中核となった。
だから、尖閣でも、どこでも、シュウダやハブ、ヘビに出会っても顔色一つ変えない。
上運天賢盛氏がシュウダを発見するや、腕をまくして生け捕りしようとしたのにさずがの多和田真淳氏も驚いた。卒業後には、誰もが、松元昭男氏も、森田忠義氏も、赴任先の奄美大島でハブを見つけると生け捕りにして、師へ送り届けた。
ハブ舎の寄贈は、高良博士の、沖縄の、ハブ研究に絶大な効果を発揮していた。
尖閣で捕獲されたシュウダも、そのハブ舎で長い間飼われていたという。

他方、尖閣で採集された生物標本、ホルマリン漬けにされた液浸標本、鳥の剥製などは、大学が一角に建てられた農学部附属標本館「風樹館」に保管されていた。
大学が誇る素晴らしい白亜の三階建ての資料館だった。
この「風樹館」は、金城キク女史(金城キク商会社長)が寄贈したものである。
このエピソードが面白い、あるとき女史が高良博士の研究室を訪れて驚いた。
机と本棚が所狭しと置かれ、天井まで生物標本類がうず高く積み置かれている。
棚に押し込められた液浸標本からはホルマリンが漏れて、室内は臭気が充満し、脳天までかきむしられるほど苦しく、今にも卒倒しかねない。
「よくもまあ、ホルマリン臭い部屋で、顕微鏡を熱心にのぞき込んでいただけますねえ！！」女史はこんな劣悪な環境では、いい研究—沖縄のためになる研究は、とてもできない、健康まで害してしまうと、即座に標本館建設寄贈を申し出た。
高良博士の要望を大幅に採用して建設し贈呈したのが、あの「風樹館」である。
琉大首里キャンパス時代に偉容さを誇った標本資料館寄贈の逸話である。
未長く記念すべき建物だった筈だが、西原への移転に伴って壊されて今はない。
現在の「風樹館」は二代目の建物である。
新館への移動作業の際、瓶が割れたり、標本が傷んでいたり不完全なものは廃棄するなど大幅に整理したという。遺憾なことであるが、新「風樹館」に所蔵する高良調査団の尖閣列島関係の所蔵標本は大半が失われて、残っているものは僅かである。

1950年代の沖縄は、復興再建の時代精神にあふれ、活力が漲っていた。
新設の琉球大学にも大きな期待をよせ、夢を託していた。
だからこそ、あの困難な時代に、物不足の貧しい頃に、尖閣調査を成し遂げることができた。その要因を挙げるとすれば、

- 1は、高良博士の研究に対するパイオニア的情熱と行動力、優れたリーダーシップである。
- 2は、沖縄全体が復興再建にかける意欲と生産増強の時代精神に燃えていた。

3は、経済界の大学の研究開発に対する認識と期待は高く、絶大な協力体制にあった。

この3者が相まって、尖閣調査の先駆的偉業は成し遂げられたと言えよう。

哀しい哉、今日の沖縄は、万事、国頼み、他者頼み、他力本願の精神に墮している。かつての自助努力の精神は、自力更生の努力は、どこかに置き忘れ去っている。

1950年代の沖縄は、学界や、経済界、各界の全てが、自らの力が頼みだった。

自らの道は、自らの力で切り拓かねばと、「成せば成る」の心意気が漲っていた。

高良調査団の初期調査の先駆的偉業は、貧しかった当時の大学における研究開発は、経済界の絶大な支援で、成し遂げられた。

復興再建、生産増強に燃えたひたむきな時代精神の、自助努力精神の、所産であったことを忘れてはならない。

(了)

2、尖閣研究 高良学術調査団資料集 下巻 あとがき

そうでなければ この海鳥の小王国(大自然)は
やがて滅亡してしまふのだ

—高良学術調査団報告書が教えるもの—

編集子

ここまで連れてきた飼主は とうの昔
断崖の石ころの下で 鱧の骨や青海綿と いっしょに
きれいな白骨となって 鹹に曝されているのに
むき出しの岩の上では 三毛も 赤斑の猫も
すっかり野生に かへってとびあるき
まきかえす黒潮の 怒濤にむかって
啼いたり 戯れ狂ふ 月夜の無人島を 想像するがよい
この島にのこった漂流漁夫の 二ひきの猫が子を生み

むらがりよって 産卵する信天翁(アホウドリ)の敵となり
爪と 嘴のふしぎな戦争畫を くりひろげた
真白な鳥糞と青空に区切られる島の突端が
まるで虎猫どもの舞台となってしまう
こんどの夏には 猫と蛇との一騎打ちが 初まろうと処へ
行ってみたい思う人は まづ銃をもって
小屋の穴から 小さな虎を撃つ稽古を したまへ
そうでなければ この海鳥の小王国は やがて滅亡してしまふのだ
(琉球風物詩集「先閣列島」 佐藤惣之助)

詩人佐藤惣之助は「人生劇場」「湖畔の宿」「上海だより」の作詞家として著名である。大正期に沖縄を訪れ、アホウドリ受難の話に魅かれて、尖閣列島へ渡島しようとした。が、願い叶わず八重山の地で詠んだのが、この「先閣列島」の詩である。

詩人の鋭い感性でこのまま小さな虎たちを退治せずに放置すれば、彼らの餌食となって「この海鳥の小王国は やがて滅亡してしまふのだ」と悲憤警告している。

それから 30 数年後の 1950 年4月、高良鉄夫博士は魚釣島に上陸して驚いた。魚釣島の海岸一帯に数万羽のアホウドリが棲息していた筈なのに、アホウドリどころか、他の海鳥も一羽も棲んでいなかった。

野生化した飼い猫虎猫たちが異常繁殖していた。

佐藤が予告したように虎猫たちの爪の餌食となって、海鳥の小王国はとうの昔に滅び去っていた。夜がふければ経節仮工場の宿営地の周りは不気味な猫のなき声が満ちて、今にも食い殺されるのではないかと心配だったという

海の彼方からやってきた虎猫たちは、魚釣島のアホウドリや海鳥たちを絶滅に追いやっていた。

人間が野ネズミ退治にと持ち込み、放置したために引き起こした災いだったが、第二次、第三次と調査を重ねるにつれ、虎猫は次第に姿を消しつつあった。

今度こそアホウドリは戻ってくるかもしれないと期待された。

ところが、別の災いが、再び海の彼方から押し寄せてきた。

島の主海鳥にとって、1度目の災いが古賀村の開拓民たち(彼らは羽毛採取や剥製づくりのため捕獲した)だったとすれば、虎猫たちが2度目で、3度目は台湾漁民だった。彼ら台湾漁民は不法上陸し、菓子材料や焼き鳥にと、南北小島の海鳥の卵やヒナを乱獲していた。

63 年の第四次調査の際は、この悲惨な光景を目にして驚いた。

古里慕情でアホウドリは戻り来って、断崖の岩棚で営巣し繁殖していたかもしれない。無惨にも、彼ら密猟者に捕獲され、食われたのならば、一大痛恨事である。

高良博士は、琉球政府、米国民政府に対し、海鳥保護のため上陸禁止措置を提言、のち不法侵入者を取り締まるため、行政(領土)標柱、警告板が設置された。

1972年復帰後は、海上保安庁第11管区の所轄水域となり、巡視船が配備された。厳重な警備のもと、台湾人等の不法上陸、海鳥密猟者を排除した。

海鳥たちが安心して暮らせる島となった。

南北小島は、アホウドリ、クロアシアホウドリが繁殖し、安住の地となっている。

高良博士は「アホウドリ王国復活へ寄せて—古里慕情帰ってきた信天翁—」(本書下巻237～242頁)の中で往昔の如きアホウドリ楽園の復活を願っている。

ところが、魚釣島は4度目の災いが海の彼方からやって来、無惨にもアホウドリ王国の夢は遠くに押しやられてしまった。

虎猫、密猟者に続いて持ち込まれたのが白いけものだった。

南島沖縄は無人の島が多く、波が荒くなると外界との遮断される。

長期にわたり食料供給が途絶えてしまう恐れがある。

山野にヤギを放って殖やし、非常時の食料源にするのが往古からの知恵だった。

絶海の孤島尖閣でも、古賀の開拓時代の頃から幾度か放っていたという。

これらの子孫だろうか、終戦直後は数頭残っていたようだ。

1952年8月の第二次調査のとき、高良博士は猟銃を持参していた。

得意の猟銃で仕留めて、美味のヤギ汁で祝宴をはる積もりだった。

ところが、鶇の目鷹の目で探したが、1頭だに目にしなかった。

学生の上運天氏が山道で迷った際、ヤギらしきものに出くわしただけだった。

あるいは鯉節工場の人たちに食べ尽くされて、とうに絶滅していたかも。

復帰後の1978年に、新たにヤギが魚釣島に持ち込まれた。

何故に、非常食用ヤギが4度目の災いの元凶へ転じたのだろうか。

政府が自国民に対して、尖閣を上陸禁止の島にしたからに他ならない。

摩訶不思議、調査団は無論、行政管轄区の石垣市議員、県議員、そして国会議員に対してさえ上陸禁止措置を布した。来訪者を閉め出し、ひとり一人つ子いない、天敵、捕食者もない島は、ヤギにとつてこの世の大楽園となった。

しかもエサになる植物はふんだん豊富にあるときているから、殖えに殖えて、情け容赦ない侵略者、最大の自然破壊者に大変身させてしまった。

魚釣島の植物がことごとく食い荒らされ、食い尽くされつつある。

新納義馬氏の「尖閣列島の植物とヤギ食害—魚釣島の植物の破壊を憂える」(本書下巻147～161頁)には被害の惨憺たる状況が記されている。(固有種センカクツツジやセンカクアオイも絶滅に瀕している！！)

このままでは、原生林で覆われたジャングルの植物相は破壊され、随所で崩落を引き起こし、幽谷岬々たる地形は変貌の憂き目に遭って、島の大自然は崩壊し、生態系は消失の危機に陥りつつあると警告している。

この状況を憂えて、日本哺乳類学会や日本生態学会、沖縄生物学会等が「ヤギを排除！！」と、これまで訴え続けてきたが、責任をとるべき政府は素知らぬ顔。

怒るべきはずの沖縄県、石垣市も、全く腰を上げようとしない。

大正期の虎猫被害に対しても、詩人佐藤惣之助の警告に耳を傾けなかった。

その結果、虎猫たちを殖えるに任せて、魚釣島を永久にアホウドリや海鳥たちが棲めない死の島に追いやってしまった。

今の状況はさらに深刻、島の大自然を滅亡の危機に追い込んでさえいる。

もう一度、詩人佐藤の雄叫びを思い起こそう！！

……まづ銃をもって

小屋の穴から 小さな虎を撃つ稽古を したまへ

そうでなければ この海鳥の小王国は やがて滅亡してしまふのだ

高良学術調査団の報告書は多くのことを教え示している。

尖閣は、琉球弧と並び東洋のガラパゴスであり、生物地理上枢要に位置し、生物の宝庫、日本の宝、人類の宝であると。

尖閣の大自然のすばらしさ、生物相が大切なことを訴えている。

アホウドリなど海洋鳥の保護と島の自然の保全を、訴え続けてきた。

70年代には、「行政区画標柱」建立や「警告板」設置の契機となり、海鳥乱獲に歯止めかけるに役だった。

2000年代における目下、愁眉の急は以下の2つである。

1は、アホウドリ王国復活に向けて「アホウドリ育成事業」を樹立推進する。

2は、益々深刻化する魚釣島のヤギ食害問題の解決、ヤギの排除である。

この高良学術調査団資料集が、これら問題解決の一助になれば幸いである。

(了)